



1.「川崎大師平間寺」は、江戸時代に11代将軍徳川家齊が厄除祈願をしたことでより広く知られることとなり、全国から崇敬を集めた。「大山門」は開創850年の記念事業として1977年(昭和52年)に建立された。2.「八角五重塔」。円に近い八角形は、完全性や包容力を象徴しているという。3.「大山門」と同じ記念事業で造られた「降魔成道釈迦如来像」。4.「薬師殿」は2008年(平成20年)に落慶。

# 仲見世も魅力の”川崎のお大師様”を訪ねて



参道にさまざまな店が軒を連ねる「川崎大師仲見世通り」。食べ歩きも楽しめる人気が高い。



店頭には「開運とんどこ餅」や「家傳せき止餅」(各¥500)など40種ほどの商品が並ぶ。「開運とんどこ餅」の原料は琥珀色の水飴で、これを練って空気を含ませることで白くなる。「ビールの泡が白いのと同じ理屈」なのだとか。



「釜あげわらび餅」(写真右・¥400)。温めて食べるおみやげ用(¥600~)もある。写真下の「生わらび餅」(¥500)のほか、厳選した天然素材で作る「いち」(¥900)も好評。



「多摩川スカイブリッジ」が開通し、羽田空港からますます近くなった川崎市。空港から車で約20分、まずは全国有数の名刹へ向かおう。

「川崎大師平間寺」は、厄除けのお大師様として知られる真言宗智山派の寺院。「初詣といえばここ」と言う関東圏の人も多く、正月三日日には例年300万人以上が初詣に訪れるそうだ。この日は朝から荒れた天気だったが、寺に近づくにつれて嘘のように青空が広がり始めた。これもお大師様のご加護の気がして、心まで晴れやかになる。

たどると、法被姿の職人2人がリズムを刻みながら純白の餅を切っている。「松屋総本店」で行われる、伝統の餠切りだ。1868年(明治元年)創業の「松屋総本店」は、「家傳せき止餅」など昔ながらの餠づくりを守る老舗。実演していたのは、「開運とんどこ餅」、いわゆるさらし餠の餠切りだった。2人の息がぴったりと合った二重奏に楽譜はなく、相手の裏をとること以外はずべてアドリブ。腕利きの餠職人は、優れた演奏者でもあるのだ。餠切りは週末や祝日など人出の多い日に行われ、仲見世の名物となっている。

「松屋総本店」の2軒隣には「大谷堂」がある。ここは本わらび粉から自家製にこだわるわらび餅専門店だ。わらび餅とはその名の通り、本来はワラビの根からとれるデンプン(本わらび粉)で作るものだ。しかしワラビ自体が希少な今、本わらび粉は非常に高価でなかなか手に入らない。ならば、店主の大谷 茂さんは山梨に畑を作り、自らワラビ栽培に取り組んだ。100kgのワラビの根に対し、とれる本わらび粉は8kgあまり。手間がかかるうえ歩留まりも悪いが、その分、本物のわらび餅はやはり格別だ。心地よい弾力に加え、吸い付くような独特の粘り。店先では熱々のできたてを味わえる「釜あげわらび餅」も販売しており、とろりと官能的な舌触りを楽しめる。

150mほどの仲見世を抜けると、重厚な「大山門」が迎ええてくれた。「川崎大師平間寺」は1128年(大治3年)、高野山の尊賢上人を開山として建立された。川崎大師というのとは通称で、ご本尊の弘法大師(空海上人)に由来する。境内には壮大な「大本堂」や「八角五重塔」、インドの寺院を思わせる絢爛な「薬師殿」などが立ち並び、見どころは多い。高浜虚子や正岡子規といった俳人の句碑なども多数点在し、碑蹟巡りも魅力だ。さらに今年10年特別な年でもある。5月1日からの一か月間、「川崎大師」は、いつも増して賑わいを見せそうだ。